夢枕獏試論
―消費される過剰な欲望―

遠藤　伸治

はじめに

夢枕獏の主な作品は、『キマイラ』シリーズにせよ、サイコダイバー・シリーズにせよ、『飢狼伝』シリーズにせよ、安倍晴明&源博雅・シリーズにせよ、主要な多くが現在も進行中である。特に、『キマイラ』シリーズ、サイコダイバー・シリーズ、『飢狼伝』シリーズは、主要な登場人物たちが変化・成長の途上であり、今後の展開を予想できない。

したがって、本論では、すでにその続編『涅槃の王』も完結している、処女作『幻獣変化』を最初にとりあげるが、継続中のシリーズ作品については、原則として本格的に論じることは避け、気づきを記すことに止める。しかし、サイコダイバー・シリーズとして続編が書かれ続けているとは言え、夢枕獏を考える上で、彼をベストセラー作家にした『魔獣狩り』については、あえて例外として論じてみたい。そして最後に、比較的完結性の高い『闇狩り師』シリーズの中から、最初の長編『蒼獣鬼』をとりあげる。

本論は、夢枕獏の初期作品、夢枕獏がベストセラー作家になって行く80年代の三作品を対象に、登場人物とプロットを中心に、三作品それぞれの差異と作品ごとに変化する多様性、そして、その多様性の中から共通する構造を明らかにするという意味での、簡単な構造的分析を行う。その結果導き出された夢枕獏の初期作品の構造とその社会性・時代性について、どのような社会的力が彼をベストセラー作家に押し上げていったのかについて考察する。

一

『幻獣変化』は夢枕獏の処女長編として書き下ろされた（80年10月）が、後に『涅槃の王』の序をなす物語として、『涅槃の王　巻ノ序・幻獣変化』として再び出版された。この『涅槃の王　巻ノ序・幻獣変化』の「あとがき」（93年10月）の中で、夢枕獏は「書き手というものは一生、自分の処女作から逃れられないもののようであります」と述べている。この夢枕獏の言葉に従って、『幻獣変化』の中から、その後の彼の作品の原型を探ってみたい。

『幻獣変化』の主人公シッダールタとシンには、後に夢枕獏の作品

群の中で、複数のキャラクターの中に分散されて行く、いくつかの要素が混在している。

シッダールタについて言えば、そもそも「円生樹」に登って「涅槃の果実」を得ようとする目的も、シッダールタ自身、「おれの目的は不老不死よ」と言う一方で、「おれはな、その天地の理の秘密を手に入れてみたいのよ」とも言う。

常に無意識の「笑みのようなもの」を浮かべるシッダールタの「美しく整った顔立ちは、まだ少年か少女のように」見え、しかし、その「口元のあどけない笑み」には、「不思議なしたたかさ」と「見る者の心を一瞬ひやりとさせる」一種の非人間的な超越性が含まれているとされる。このイメージは、『魔獣狩り』の美空に最も近い。また、性と年齢を超越しているように見えるという点に限って言えば、『闇狩り師』や『キマイラ』シリーズに登場する龍王院弘や、『飢狼伝』シリーズの姫川勉にも通じる。また、シッダールタが、万物の流転、その形象は絶え間なく変化し続けながら、その本質は不変であるという「天地の理の秘密」を語るところは、『陰陽師』の安倍晴明&源博雅シリーズとも共通していると言える。

そして、シッダールタは、王宮に育ち、権力によって何人もの美女を自由にし、自分を愛してくれる父母と妻子を持ち、その果てに、それらのすべてを捨てて、金でも権力でも手に入らない「不老不死」と「天地の理の秘密」を手に入れたいという、最も過剰な欲望を抱く者である。シッダールタは欲望を否定するのではない。シッダールタは、「不老不死」／「天地の理の秘密」を得るために、そのほかのあらゆる世俗的・現実的欲望を犠牲にする者なのだ。

そして、現実にはあり得ないはずの「不老不死」が、「ナ・オム」すなわち「存在してはいけないもの」の領域にある「円生樹」の「涅槃の果実」を得ることによって実現するかもしれない、というところから『幻獣変化』のプロットは展開し始める。シッダールタは、「涅槃の果実」を奪い合う競争者であることを公言することによって、リーダーであるゼンの心を掴み、禁断の領域に分け入る一行に加わえられる。さらに、シッダールタは、己のことしか考えないはずのシンをはじめ、敵であるスジャータの心までも惹きつけ、その一方で、リチアのシッダールタに対する想いは冷めるのであるが、これらのことは、あらゆる世俗的なものを犠牲にしても「不老不死」／「天地の理の秘密」を得ようとする、シッダールタの欲望への肯定性・忠実性による。

この欲望への肯定性・忠実性おいて、『幻獣変化』のシッダールタは、他の夢枕獏の作品の敵役たち、例えば、『魔獣狩り』の黒御所が、単なる悪役の持ちえない魅力を備え、何ものにも縛られない猿翁のような人物を従わせることと共通性を持ち、さらに『蒼獣鬼』の戸田幽岳にさえ通じる部分があると言える。

初めてシッダールタに出会ったシンは、シッダールタに反射した己の殺気を恐れて跳ね飛ぶ。シッダールタは、相手を殺してどこまでも生き延びようとするシンの欲望を写す鏡であり、人の心の奥にある欲望を目に見える具体的な形にして引きだし、その欲望を肯定する者である。シッダールタという鏡には、すべての人間が、あらゆるものを犠牲にしてもいつまでも生き延びたいという欲望を抱く点で、社会的属性とは無関係に平等な者として写るのだ。それは、「円生樹」を世界中に茂らせることによってスジャータが実現しようとする主張でも

ある。そして、人間の遺伝子に影響を与え、獣に変えるという「円生樹」、また、「円生樹」に近づく者は誰でも「涅槃の果実」を手に入れて「不老不死」になろうという欲望にとらわれるという、『幻獣変化』における「涅槃の果実」／「円生樹」という設定そのものでもある。

「涅槃の果実」に触れた者は「自分の望んでいた欲望、この世の快楽がすべて己のものとなったとしても、このような表情は浮かべまい。人間の底に澱のようによどむ、本人も気づかないあさましいものが、その恍惚の表情の中に剥き出しになっていた」とされている。この意味で、シッダールタをはじめすべての登場人物にとって、「円生樹」に登ることは、自分の心を覗き、己の欲望を確かめに行くことにほかならない。

シッダールタが「涅槃の果実」を前にして出会うのは、胎児のすがたのままで数百年を生きてきたという百老鬼であって、それは「不老不死」というシッダールタ自身の欲望のグロテスクに誇張された姿である。シッダールタは、この百老鬼に会って、「不老不死」と「天地の理の秘密」という二つの目的のうち、「不老不死」を捨て去り、シッダールタに替わって、百老鬼が「不老不死」を求め続ける役割を担う。そして、シッダールタと百老鬼とが精神力による持久戦を闘い、最後に百老鬼は自滅する。

しかし、それは、シッダールタが過剰な欲望を捨て去ったことを意味しない。シッダールタは、己の志向するものが、あらゆるものの本当の意味を知る者、常に変わることのない普遍的「真理」の主体となるという、「不老不死」以上に純粋な超脱的欲望であることを確認したのであって、むしろ欲望のために世俗的なすべてのものを犠牲にするというシッダールタの志向は、より強化・純化されたと言える。

『幻獣変化』の冒頭の場面から、すでにシッダールタは「無」を体得した者として登場し、シッダールタに、「天地の理の秘密」を知るためにはすべてを犠牲にしても良いのか、という人間的な葛藤や迷いはない。『幻獣変化』の終わりで、シッダールタは、百老鬼が到達できなかったであろう終着点に行き着くだろう自分をイメージする。そして、『幻獣変化』に続く『涅槃の王』で、シッダールタは「天地の理の秘密」を知るのだ。

シッダールタとは対照的に過剰なまでの人間性を与えられ、シッダールタに替わって葛藤と迷いを担うのがシンであり、シンは『幻獣変化』のもう一人の主人公である。シンは、もともと一行の他のメンバーほどには〝涅槃の果実〟などに興味はなかったはず」なのに、なぜ命がけで「円生樹」に登っているのか、なぜ適当なところで逃げないのか、自分は何のために闘うのか、自分は何なのか、ひたすら悩み続ける。この闘いながら自己に悩み、闘いを通して自己を発見して行くという点で、シンは、『魔獣狩り』の文成仙吉や『飢狼伝』の丹波文七といった、夢枕獏の作品に登場する格闘家たちにつながるキャラクターである。

「どっちが強いか、あるのはそれだけだぜ」とシンは言う。階級社会に対する憎悪につき動かされ、己の肉体だけを武器として闘ってきたシンは、金や権力といった社会的力を否定し、筋力による平等を主張する。シンは、ナーダッサのような上位階級者にはもちろん敵意を剥き出しにする一方、リチアのような闘わない被差別者に対しても屈折した怒りを向ける。階級社会を構成している者すべてを憎悪するシ

ンにとって、周囲のすべてのものと闘い、勝つことが生きることなのだ。

そのシンが出会うのは、闘って倒した相手を喰らう、文字通り弱肉強食の魔獣たちである。シッダールタにとっての百老鬼がそうであったように、彼らは、己の力だけを信じて、相手を倒して生き抜こうとするシン自身の、グロテスクに誇張された、しかし、より純化した姿にほかならない。彼らと「二頭の野獣」のように闘うことによって、シンもまた己の真の姿を発見する。

シンは、リチアの中に娘の姿を見出すナーダッサに託すまで、「なぜリチアを捨ててこなかったのか」と自問し続けながら、己の力の限界までリチアを守り続ける。自分自身を非情な人間と信じているにもかかわらず、シンは、優しさや人間性を捨てきれない。それが、シンと魔獣とを分けるのであり、シン自身の気づかなかった己の姿なのだ。シンがまれに見せる「人なつっこい子どものような笑顔」や「困った子どものような表情」は、『魔獣狩り』の九門風介や『闇狩師』の九十九乱蔵と共通する人間性を表している。

この点において、「どっちが強いか、あるのはそれだけだぜ」という言葉は、シンが自分について言葉にできる部分にすぎない。残った部分は、シンの肉体によって表現されるのであり、言葉より肉体の方が、より本質的であり、重要である。

シンは、「悪鬼に似た形相」で「獣の唸りに似た声」をあげ、「憤怒の炎」を燃やして闘う。しかし、シンの肉体は、そのぎりぎりの瞬間まで、「内部から爆発しようとする」「おそろしい内圧」を抑える。シンは、あらゆるものに対する憎悪や敵意、「身を内側から焦がすような熱い、暗い、紅蓮の炎」を闘いのエネルギーとしてかき立て、それを限界まで自制し、コントロールし、そのすべてを目の前の闘うべき相手にぶつける。それがシンの闘い方であって、闘わなければならないという強い感情の高まりや、切実さなしに、気まぐれや物の弾みで闘うことはできないのだ。

したがって、シンの力は、自分より弱い者に向けられることはない。シンは、士族階級の誇りを機会あるごとに誇示し、差別的言葉を吐く弓の名人ナーダッサと対決することを宣言するが、ナーダッサが闘いで傷ついた後では「粗野な口調では合ったが、優しげな声音」で言葉をかける。結局、シンが死力を尽くして闘うのは、自分の分身とも言える、ただ自分よりも、勝つことだけに純粋で、より人間性を持たない魔獣たちなのだ。

そのために、シンは闘いに臨み、それまで抑制していた「苦痛の塊を吐き出す」ことのできる「歓喜の響き」をこめた叫びを上げ、そして、相手を倒した後「ひどく哀しそうな顔」をするのだ。

二

夢枕獏は、『魔獣狩り』について、一巻新書判「あとがき」（84年2月）で、「ぼくの、最初の書き下ろし長編になるはずであった」にもかかわらず、「それが一五〇枚を越えたところで」行き詰まったため発表が遅れたと述べ、また、三巻新書判「あとがき」（84年12月）では、「結局この物語は、文成仙吉の物語であったのではないか」と述べている。

「彫りの深い貌」と「ごつい岩のような肉体」とを持った巨漢という文成仙吉の設定は、醜い容貌で「全体の印象は蜘蛛に似ていた」とされる『幻獣変化』のシンとは対照的である。しかし、文成仙吉の物語に焦点をあてるならば、『魔獣狩り』は、『幻獣変化』のシンの物語が終わったところから書き始められていると言うことができる。

すなわち、『魔獣狩り』の冒頭で、文成仙吉は、蟠虎に追われる。猿翁によって造られた獣人である蟠虎については、この時点ですでに「奥深い意識の暗黒淵(やみわだ)から文成に取り憑いた、文成自身の影ともいえる」と述べられ、この初期設定は、『幻獣変化』のシンと魔獣たちとの関係にほぼ等しい。そして、シンが「なぜリチアを捨ててこなかったのか」と自問し続けながらリチアを捨てられなかったように、文成仙吉も「久美子を始末して、ずらかるのが最良だったのだ」と思いながら、久美子を連れて逃げる。そして文成仙吉も「全身全霊を揚げて闘わねばならぬ相手」である蟠虎を目の前にして「燃えるような歓喜」を覚える。

しかし、文成仙吉は蟠虎に敗れる。肉体的に敗れ、久美子を奪われ、指を失っただけでなく、「恐怖」に震え、「己の肉体に抱いていた圧倒的な自信」を打ち砕かれ、「己の誇り」を失うのだ。ここから、シンとは違う、文成仙吉の物語が始まる。文成仙吉は、己を鍛え直し、再び蟠虎の前に立ち、蟠虎と素手で闘って勝つことによって、失われた「己の誇り」を取り戻そうとするのだ。『魔獣狩り』における文成仙吉の物語は、まさにこれだけの物語である。

文成仙吉は、猿翁のように「儂が求めているのは、不老不死だ」と言う黒御所に興味を抱くことも、九門鳳介のように「不老不死」の鍵を握る空海のミイラに興味を抱くこともない。文成仙吉にとって、黒御所も空海のミイラも、蟠虎とのリターンマッチのために利用できるもの、あるいは障害となるものとしての意味しかない。この意味で、文成仙吉は、『魔獣狩り』の伝奇性そのものを否定するかのような存在とも言える。

「欲望の権化」である黒御所が「不老不死」を求めて空海のミイラを盗み、サイコ・ダイバーである九門鳳介にその秘密を探らせようとする。黒御所には、人間を獣に変える技術を持つ獣師猿翁と猿翁に造られた巨大な獣人蟠虎、「生命の光教団」の教祖石橋三輪、広域暴力団神明会などが従い、それに対し、無痛症であるがゆえに「あどけない少女のよう」な顔に非人間的な笑みを浮かべる天才密教者美空が、高野山からの依頼で空海のミイラを取り戻そうとする。文成仙吉抜きでも、「不老不死」と空海のミイラをめぐるストーリーは成立している。

カンフーの達人とは言え、気で刀を受け止めたり、離れた場所から気を当てて攻撃したりせず、突き蹴りといった肉体による闘いしかしない格闘家文成仙吉は、『魔獣狩り』の伝奇性とはむしろ異質な存在である。実際、『魔獣狩り』は、黒御所たちの行う「不老不死」のための儀式に、銀行から一億円を奪って逃走中の文成仙吉たちが偶然遭遇し、紛れ込んでしまったところから始まるのであって、伝奇小説と格闘小説という異質なものを交差させたところにこそ、夢枕獏の作品の本質的特徴がある。

文成仙吉の側から照射してみれば、猿翁、蟠虎、九門鳳介、美空、これらの登場人物は、獣師、獣人、サイコ・ダイバー、密教者という、

「不老不死」の秘密をめぐる伝奇的役割だけでなく、皆それぞれに独自の体術を備えた格闘家としての側面を持つ。そして、彼らは、「不老不死」の秘密を手に入れるという目的のためだけではなく、必要以上に、目的を離れて、自分自身のために闘うのだ。

猿翁は黒御所のために動いてはいるが、「黒御所殿は黒御所殿、わしはわしさ」と言い、美空と闘いながら「おもろいなあ、美空とやら」と言う。味方である美空と立ち会って見せるよう、師である佐久間玄斎に言われた九門鳳介には「楽しもうとするような笑み」が浮かび、二人の立ち会いを見終わった佐久間玄斎は「久しぶりにおもしろいものを見せてもろうたわ」と言う。彼らは、格闘家として、自分と異なる他の格闘家の技術に興味を持ち、優劣を競うことによって、「己の誇り」を満たそうとし、そして何よりも自分の技術を100パーセント発揮できる瞬間を楽しむのだ。

九門鳳介も猿翁も、登場人物たちはしばしば「面白い」と言う。彼らを動かす理由がそれである。九門鳳介は「仕事の話ならよ、そりゃおめえ、金だぜ」と伝法な調子で言う。しかし、鳳介が仕事を選ぶ優先順位は、金よりも「面白そうな仕事」かどうか、である。金は重要で欲しい、チャンスを掴んで大金が入ってくるなら拒まない、しかし、それを手に入れたるために、自分にとって関心のあることを後回しにする気はない。彼らが欲しいものは、金では買えないのだ。猿翁は、黒御所という人物に「興味」があるという理由だけで、黒御所に仕えている。彼らは、金や理想などのためではなく、まったく個人的な気持ちのためだけに闘うのであって、徹底的に個人主義者である。

この点に関して、彼らは、「己の誇り」のために闘う文成仙吉と同様である。

したがって、登場人物たちは、作品全体を通して、それぞれ自分自身の目的を勝手に追求するのであって、列伝的である。彼らはしばしば共に闘う。しかし、それは、敵の敵は味方であるといった戦略的な共闘に過ぎない。彼らは、あくまで自分自身の目的のために闘うのであって、協力すべき共通の目的・理念などない。金銭的報酬をともなう依頼も、見せかけの便宜的なものに過ぎず、彼らは、自分だけの、自分にとってだけ意味のある感情に基づいて闘う。むしろ、敵対する者同士の間に、相通じる心情が見られることがあるが、そのような場合においても、彼らは共感に基づいて手を携えるどころか、手加減することすらない。そのような相手こそが彼らの死力を尽くして闘うべき相手なのだ。(このことは、『魔獣狩り』以後のサイコダイバー・シリーズも、また『飢狼伝』シリーズも、現在まで変わらない。)

ただ、彼らは、欲望の強度という点において、「不老不死」を欲する黒御所ほど、また、ただ勝つことを欲する文成仙吉ほどに、強くはない。猿翁は自分が「不老不死」に成りたいとは思わず、蟠虎は猿翁の命令に従っているだけであり、美空にとって空海のミイラを取り戻すことは高野山からの依頼であり、九門鳳介は「好奇心」を抱いているだけである。猿翁は、平気で人を殺す点で最も非人間的な格闘家であるが、その猿翁でも、勝つことよりも、闘い自体を楽しむところにわずかな人間性が残されている。美空もまた、平気で敵を拷問する非人間的側面を持つが、高野山とのつながりを断ち切ろうとはしない。蟠虎は久美子に対する愛情に目覚め、九門鳳介は、『幻獣変化』のシンと共通する人懐っこい子どものような素朴さと優しさを与えられ、

誰よりも人間味に溢れている。こうしたそれぞれの差異、これらの人間性が、生きたいという欲望を極限まで求める黒御所と、勝ちたいという欲望を徹底的に追求する文成仙吉と中心にして、彼らそれぞれの立つ場所を決めるのだ。

『魔獣狩り』の最後で、再び蟠虎と闘った文成仙吉は、生死を分ける瞬間、とっさに久美子の死体を武器として蟠虎に叩きつけ、その瞬間に隙を見せた蟠虎を倒す。その時、蟠虎は文成を「憐れむような眼で」見、文成は「獣は、蟠虎ではなくおれのほうなのだ」と気づく。あらゆることを犠牲にして、蟠虎に勝ち、「己の誇り」を取り戻すことだけを目指してきた文成は、素手で人間をバラバラにする獣人蟠虎よりも人間性を失った自己を発見し、「無明の闇」に陥る。この文成仙吉の姿は、すべての人間性を犠牲にして「不老不死」を得ようとした黒御所が、やはり『魔獣狩り』の最後で、人間の姿を失い、角を生やし牙をむき出した巨大な鬼に変身してしまうことと同じであり、「魔獣」を狩っていた者が己自身の「魔獣」に突き当たるところで『魔獣狩り』は終わる。

三

『魔獣狩り』以後の作品に目を向ければ、プロレスラー梶原に敗れ、「己の誇り」を取り戻そうとする丹波文七を主人公にした、『飢狼伝』シリーズは、『魔獣狩り』よりも伝奇性の薄い（葵流が登場したあたりからやや伝奇性が濃くなってきてはいるが）、より純粋な格闘家小説であり、『闇狩り師』シリーズの主人公九十九乱蔵は、格闘小説の持つ肉体のリアリズムと気を操る伝奇性とを一人で体現するスーパーヒーローである。また、『闇狩り師』シリーズや『キマイラ』シリーズに登場する龍王院弘もまた、伝奇小説の中に交差した、リターンマッチによって「己の誇り」を取り戻そうとする格闘家である。以下、『闇狩り師』シリーズの中から、最初の長編である『蒼獣鬼』（「妄霊篇」85年9月・「異神篇」86年3月）について論じたい。

『蒼獣鬼』の戸田幽岳もまた、『幻獣変化』のシッダールタや『魔獣狩り』の黒御所と同様に「不老不死」を欲望する登場人物である。しかし、幽岳は、「爬虫類」を連想させるという、夢枕獏の作品語彙において最も非人間性を表すイメージが与えられており、シッダールタや黒御所と違って、読者の共感の向かない単なる悪役に設定にされている。また、幽岳の場合、シッダールタや黒御所と違って、自らの肉体をそのまま保つ長寿という意味での「不老不死」は最初から欲望の対象ではなく、すでに老いてしまった自らの肉体を捨て、鳴神真人という少年の肉体に自分の記憶と意識を移植することで、自分という意識をどこまでも存続させようとする。

読者の共感がある程度向くのは、「汚れた白い道服」姿の鳴神素十である。すでに汚れてしまってはいるのだが、本来は「白」であった「汚れた白い道服」は、夢枕獏の作品でしばしば使われるダーティヒーローの登場人物に与えられるイメージである。いざなみ流陰陽師の家元の血筋とされる素十は、かつては幽岳とともに、近親相姦による一種の遺伝子操作よって、自分たちの後継者となるべき霊能力者を造りだそうとしていたのであるが、自分たちの後継者として作り上げた鳴神真人を、幽岳が、意識の移植によって自分だけの後継者としよう

としているばかりか、実は後継者ではなく、幽岳の意識を存続させるための道具としてしか考えていないことを知り、真人を守って、幽岳と闘うことになる。

そこまでして、後継者を造ろうとした理由について、素十は乱蔵に「儂が習得した技、このまま埋もれさせるにはくちおしかった」と語る。素十にとって、真人は「習得した技」を伝えるべき孫であり、一方、幽岳にとっては、移植のための肉体にすぎない。つまり、素十と幽岳との闘いは、子孫を残し、技術や知識を伝えるという遺伝子的な継続と、時間の中で消滅せざるをえない個の意識の限界を超え、あくまで己の自我を存続させたいとする欲望との闘いだと言える。ただし、素十もまた、自然な遺伝子的継続ではなく、意図的な操作を行っており、結局この二人は闘いの結果ともに斃れる。この二人の闘いに、真人の姉に真人を守るように依頼された乱蔵が参加し、乱蔵もまた幽岳と闘うというのが、『蒼獣鬼』のおおまかなプロットである。

乱蔵は、素十が幽岳との因縁を語るのを聞いて次のように思う。

「このふたりが、どのような因果を持ち合っているかはわからないが、たとえ、敵として憎合っていようとも、お互いに、相手が、己の真の理解者であることは、どちらにもわかっていよう。

乱蔵には、それがわかる。

それは、乱蔵が、やはり、このふたりと同じ闇の大気を呼吸し、その闇を業としている人間だからである。

もし自分が、あの真壁雲斎を師として得ていなければ—

と、乱蔵は思う。

あるいは自分もまた、この鳴神素十のように生きるべく運命づけられていた人間であったのかもしれないのだ。

人類の限界とも言えるパワーの巨体を持ち、その巨体を操る拳法にも、気を操る仙道にも秀でているスーパーマンという設定を与えられた九十九乱蔵の内面の孤独を感じさせる珍しい場面である。乱蔵を理解し、世俗的な日常世界に繋ぎ止めておくことができるのは、雲斎一人なのだ。仮に、雲斎という師匠を得ることがなければ、乱蔵もまた、誰からも理解されない、あまりにも強すぎる者としての孤独の中で、素十が幽岳と関わりを持ってしまったように、過剰な欲望との関係にからめ捕られ、闇の世界に埋没して自らの人間性をすり減らし、破滅への道を歩む可能性もあったのだ。このような優れた者の孤独とその者を日常的世界に繋ぎ止めておく友情というテーマは、安倍晴明&源博雅・シリーズでは全面的に展開されているが、『闇狩り師』シリーズでは珍しい。

乱蔵は、確かに女性にも子供にも優しい。玄角のような他の祈とう師からも、全幅の信頼を置かれ、頼りにされる。しかし、それは、常に頼りにされる保護者としての優しさであって、乱蔵は、繊細で感傷的な弱さや子供っぽい甘っちょろさなど誰にも見せず、敵と闘い、憑き物を落とす。師匠雲斎とも普段たわいのない冗談を言いあってじゃれているだけである。乱蔵は、どんな状況でも変わらない「みごとな自然体」を体得し、すでに完成された、もはや成長しない大人であって、このような優しい強者の成長過程の表出は、『キマイラ』シリーズに登場する乱蔵の弟三蔵に託されている。しかし、この乱蔵の内面も、やはりこのような微妙なバランスをとって保たれているのだ。

一方、乱蔵が救い出し、守る真人は、「少女のように美しい少年」

とされ、その無垢な弱さと繊細さゆえに、周囲の人間の嗜虐性を刺激し、暴力性を引き出さずにはおかない存在として設定されている。それは、乱蔵のまさに裏返しの存在である。『蒼獣鬼』のクライマックスで、乱蔵は、幽岳に取り憑かれ、半ば幽岳に成ってしまった真人と闘わなければならなくなる。

起きた時には、乱蔵の足が、地を蹴り、逃れる間もない爪先の空間を固形物にかえて、真人のボディを襲っていた。

「じゃっ」

真人が、両腕をクロスさせて、それを受けた。

真人が、大きく後方へふっ飛んで、仰向けに地面に倒れた。

乱蔵の爪先に、はっきりと、受けた真人の腕の骨の折れる感触があった。

倒れた真人に走り寄り、体重をのせて膝を落とした。

一瞬でも気を抜いたら、その瞬間に反撃が待っている。

この勝機を逃すわけにはいかなかった。

普通ならば、腹筋を鍛えていないこの少年の内臓は破裂しよう。

場合によっては、死にさえ至るかもしれない。

それを覚悟の攻撃である。

しかし、この肉体に潜んでいるのは幽岳である。真人自身も、霊能力者としての天分をこの肉に秘めているのだ。

「ぐうっ」

と、真人が呻き、唇から、血をふいた。

その喉に、左手をあて、真上から乱蔵は真人を睨んだ。

真人の顔が変貌していた。

そこに、真人の優しい顔があった。

驚いたような眼で、下から乱蔵を見あげていた。

その顔が苦痛に歪む。

「おじさんー」

真人が言った

「痛いよ……」

その赤い唇が動いた。

「真人……」

乱蔵の内部に、一瞬、とまどいが湧いた。

その瞬間であった。

乱蔵は、自分の右膝に、鋭い痛みを覚えていた。

乱蔵は、真人が死に至るかもしれないことを覚悟して手加減のない攻撃を加え、次の瞬間には、真人の苦痛に歪む顔を見てとまどい、その隙をつかれて反撃される。幽岳に成ってしまった真人と、元の優しい少年である真人との変化は、傍点のついた「真人」と、傍点のつかない「真人」とによって表されているが、二つの人格の間で変化するのは真人／幽岳だけではなく、それに同調して乱蔵もまた、自らの暴力性と優しいヒューマニズムとの間を揺れ動くのだ。

一般的日常の中では十分に使われることのない乱蔵の力と技術、乱蔵の過剰な強さは、幽岳のような非人間的な怪物を相手にしてはじめて、完全に駆使され、開放される。全力を込めた一撃の瞬間こそ、乱蔵が己のアイデンティティを確認できる時なのだ。しかし、同時に、死力を尽くしたその一撃を止め、反撃を受けるからこそ、乱蔵なのであり、乱蔵が、たとえ相手が人の嗜虐性を刺激する少年の姿であり、

しかも、その少年の正体が非人間的な怪物幽岳であることを知っていても、暴力の中に我を見失う人間ではないことは、闘いによってこそ証明されるのだ。それは、『飢狼伝』シリーズのような格闘家小説においては、無制限の暴力とルールとの拮抗という形をとるのであるが（例えば主人公丹波文七が己に課すルールは素手ということである）、闘いによって自己を自分自身に証明するという点において、乱蔵もまた格闘家としての側面を持つ。

乱蔵は、幽岳と闘うと同時に、己の暴力性とも闘っているのであり、この意味において、幽岳は乱蔵の暴力的側面を誇張した分身だと言うこともできる。そして、乱蔵が幽岳の非人間的な暴力から救おうと懸命になる少年は、乱蔵自身の優しい繊細な側面の分身だと言える。乱蔵は、生死を分ける闘いの瞬間においても、暴力性と優しいヒューマニズムという相反するものの葛藤を保持し続け、真人という繊細で優しい少年を消し去り、暴力だけに収束させてしまおうとする幽岳と闘う。それは、相互の暴力の応酬の中で抑圧され、失われようとする乱蔵自身の深奥にある繊細な少年性を守ることであり、真人は、乱蔵が表面に出すことのできない乱蔵自身の弱い部分、繊細な部分の分身なのだ。

また、作者レベルまで想像を広げるならば、少年を守るために闘う乱蔵に夢枕獏自身が自己移入しながら書いていると言うこともできる。夢枕獏は、『魔獣狩り』の一巻新書判「あとがき」で「これまで叙情的（リリカル）なものを多く書いてきた自分が職業作家としてどこまでやれるのか」と書き、二巻新書判「あとがき」（84年7月）で「注文があって、枚数を決められる。テーマすら〟今月はこういったもので〟と向こうから与えられる場合がほとんどである。しかし、それがルールであるなら、書くも書かぬもその中での勝負なのだ。そのルールの中で、どう自分らしさを盛り込んでゆくかなのだ」と書いている。乱蔵とともに、夢枕獏もまた、伝奇小説の書き手となり、注文に従って、エロスやバイオレンスを書く中で、失われようとする繊細な叙情性を救い、守るために、作家としての技量の限りを尽くして闘っているのだろう。

おわりに

ジュネーブ大学でほ乳類のクローニングに初めて成功したのが一九八一年。中国の楼蘭遺跡で六四七〇年前（後に三八〇〇年前と訂正）の少女のミイラが発見されたと報道されたのも同年。一九八二年には、遺伝子操作で作られたヒト・インシュリンがアメリカで製品化される。夢枕獏の想像力を刺激したものが実際にこれらの具体的な出来事だったかどうかは別にしても、『幻獣変化』のシッダールタ／百老鬼、『魔獣狩り』の黒御所、『蒼獣鬼』の戸田幽岳、これらの登場人物たちが、皆「不老不死」を求める者たちであり、『幻獣変化』では人の遺伝子に影響を与える「涅槃の果実」が、『魔獣狩り』では空海のミイラが、『蒼獣鬼』では遺伝子操作によって造られた鳴神真人が、「不老不死」の鍵を握るものと設定されているのは、少なくとも、こうした時代状況の反映であると言うことはできるだろう。

そして、百老鬼、黒御所、戸田幽岳、「不老不死」を純粋に強く求めるこれらの登場人物たちは、皆、主人公であるシッダールタ、九門鳳介／文成仙吉／美空、鳴神素十／九十九乱蔵たちが闘う、非人間的

な敵、怪物として表象される。ここには、発達しつつある遺伝子操作やクローニングなどの先端技術が、あってはならない禁断の領域、いわゆる「神の領域」に踏み込むものではないかという倫理的な怖れ、また、それらの技術が暴走しないようにコントロールできるのかという、オーバーテクノロジーに対するエコロジカルな不安が投影されていると考えられる。

しかし、敵である百老鬼、黒御所、戸田幽岳たちと、主人公であるシッダールタ、九門鳳介／文成仙吉／美空、鳴神素十／九十九乱蔵たちとの関係は、単純な善と悪という対極の関係ではなく、むしろ分身や同類だと言ってよい。滅ぼす側の主人公たちは、ただ敵役の者たちほど強く純粋に欲望を追求しないだけなのだ。

『幻獣変化』のスジャータが「おぬしらがわれらを怖れるのは己を怖れることなのだ」と言うように、「不老不死」の願望は誰にもありうる我々自身の欲望である。しかし、現実にはあり得ないと思われていた「不老不死」に手の届く可能性が生まれた時、その欲望を抑圧する社会的制度や権力構造は、未だ既成の体制にはない。大衆の欲望の暴走を既存の制度や権力構造が抑圧するなどといった過去の図式は既に当てはまらないのだ。したがって、我々は欲望の無制限な開放を密かに肯定しつつ、同時に、己の欲望を過剰な欲望ではないかと怖れ、自ら己の欲望を抑制しようとするのだ。

純粋に過剰な欲望だけを追求する者は、百老鬼、黒御所、戸田幽岳のような怪物として表象され、滅ぼされる。このようなエクスキューズを通すことによってはじめて、過剰な欲望はエンターテイメントとしての表出が可能になるのであり、消費されるものになるのだ。

もちろん、『幻獣変化』、『魔獣狩り』、『蒼獣鬼』は、バイオテクノロジーの発達だけに還元されるわけではない。『幻獣変化』のシン、『魔獣狩り』の九門鳳介／文成仙吉／美空、『蒼獣鬼』の鳴神素十／九十九乱蔵、彼らが、格闘家として求めるものは、自分とは何かという問いに対する答えである。

彼らは、強すぎる肉体を、少なくとも無痛症の美空のようにある能力に関しては非凡すぎる肉体を持ち、その点ですでに周囲から疎外される。そして、一般的な護身という意味では強力すぎ、危険すぎる技術を身につけ、さらに一般社会から疎外される者になる。しかも、現実的な強さという意味では、強力な武器を持った相手にはかなわず、一般社会において彼らを評価するものは何もない。しかも、自分とは何かという問いに対する答えは、闘っている時には、言わば肉体的啓示として感得されるが、闘いが終われば、跡形もなく消え去る。それでも、彼らは自己の存在理由を自分に示すために闘うのだ。

したがって、彼らをストイックだと言うこともできるが、それは、自己の存在理由を自分に示すためには、他のあらゆる世俗的・現実的欲望を犠牲にするという意味でのストイックであり、自己の存在理由を求めるということに関しては、彼らもまた、過剰な欲望を抱く者たちなのだ。

『飢狼伝』シリーズのような純粋な格闘家小説に目を向ければ、プロレスもあれば、空手の試合もある。しかし、あるルールの内に止まるならば、闘いはたちまちに日常化し、自分とは何かという問いに対する答を与えてくれなくなる。そして、一度は感得した啓示の瞬間を自ら捨てるという喪失感とともに生きることになる。一方、あらゆる

現実的ルールを超えた究極の闘いを通して自己の絶対的存在理由を証明しようとするならば、『魔獣狩り』の文成仙吉のように、果てしない暴力の迷路の中で自己を見失うことになる。

格闘家としての登場人物たちは、この両者の間のどこかで、己の暴力性を自制し、自分のルールと自分の闘いのスタイルを選び取る。そして、自分と同じルールを選んだ相手と、時には、過剰な欲望により忠実に、より過激なルールを選び取った相手と闘う。その時、自己の限界としてのアイデンティティが確かなものとして立ち現われることを感じるのだ。

『幻獣変化』、『魔獣狩り』、『蒼獣鬼』が書かれた（付け加えれば、『飢狼伝』シリーズも書き始められた）80年代の日本を思い起こせば、例えば85年には、G5が開催され円高が定着し、翌年には、日本の海外純資産が世界一になり、やがてバブル経済へと向かった時期であり、日本が高度資本主義社会、大量消費社会に突入し、長寿や健康ばかりでなく、さまざまな世俗的・現実的欲望があらわになって行った時代でもある。また、80年代の日本は、普遍的な真理、社会に共有される理念や理想のような、我々の人生を意味づけるいわゆる〈大きな物語〉に対する不信感のあらわになり、意味などを重く抱え込むよりも、軽やかに〈戯れる〉ことがトレンドだともてはやされた、ポスト・モダンの時代でもあった。

格闘家としての登場人物たちは、時代の動きの中で失われて行った自己の存在理由を過剰に求める者たちであり、こうした時代の動きとまったく異質である。しかし、哲学や思想の言説に関しては失われてしまった自己の存在理由が、彼らの過剰な肉体によってならば、再びリアルなものとして得られるかもしれないという幻想を、彼らは生み出す（格闘家ではないが、シッダールタが求めるのは、普遍的真理である）。この意味で、彼らは、疎外された者たちであると同時に羨望の対象として表象されたのであり、こうした時代の中でこそ、読者の心を惹きつける主人公たちに成りえたのである。

以上見てきたように、『幻獣変化』、『魔獣狩り』、『蒼獣鬼』は、我々が欲望を無制限に肯定しつつ、その己の欲望の深さに過剰性を感じ、怖れと不安を覚え、自制を考えるという、過剰な欲望をめぐる葛藤の物語であり、その物語をSF的・伝奇的に誇張し、消費されるエンターテイメントの形にしたものだと言えるだろう。

最後に付け加えるが、『魔獣狩り』の中で、文成仙吉は、黒御所たちの儀式を目撃して、「アメリカのある新興宗教まがいの教祖が、美人女優を女優の自宅で惨殺し」た事件と、「やはりアメリカの新興宗教の団体が、ある土地に共同集落コミューンを造り、全員の女とSEXに明け暮れたあげく、会員全員の毒殺—自殺をはかり、おびただしい数の人間が殺されている」という事件を思いだすが、「だが、日本では、このような事件はほとんどない」と考える。人間の心の奥の欲望の深さ、暴力性や獣性の強さ、心の闇の暗さを表す、猟奇的殺人事件や無差別殺人事件が多発するのは、日本では90年代以降のことであるが、そうした時代相もまた、夢枕獏をベストセラー作家に押し上げていく力となったと思われる。

（えんどう　しんじ、広島県立大学助教授）